

## 劇場専属舞踊団検証会議（第2回） 意見まとめ

（事務局の発言を含む）

日時：令和元年7月8日（月）13:30 から

会場：新潟市役所 第2委員会室

### ○金森氏プレゼンテーション

- この場を設けてもらったことに感謝している。今まではなかったこと。
- 今日は Noism 芸術監督としてではなく、りゅーとびあ舞踊部門芸術監督としてきたと思っている。15年間のその都度の判断も舞踊部門芸術監督として行い、Noism1、Noism2を立ち上げてきた。
- 立ち上げたときに、「新潟から世界へ舞台芸術を発信する」という理念を掲げ15年間活動してきた。
- 舞踊部門は Noism しか観られないことの問題は痛感していた。だから東アジア文化都市交流のときに NIDF を立ち上げ、海外の舞踊団を呼び込むようなアプローチもしてきた。
- Noism 以外の公演を実現するために、Noism の事業費を削ることは考えていない。それをするとも Noism を立ち上げたときの理念が崩れてしまう。これは自分の信念である。その両立を図ることが課題であると認識している。
- 新潟の舞踊団であるということを認知してもらうために、NNC (Niigata Noism Company) に名称を変更したい。
- プロフェッショナルの選抜カンパニーとして Noism0 を新たに立ち上げる。小規模な公演を求められることが多々あったので、そういった要望に応えられる体制を整えた。
- 金森作品以外が最近観られないという声がある。これまでゲストの振り付け家と呼ぶことがあったように、もともと金森作品だけのカンパニーとしては立ち上げていない。ただ、世界に通用するレベルを維持するためには自身も作家として成熟する必要があること、ゲストを呼ぶには費用がかかることから次第に自身の作品が増えていった。今後もゲストの振り付け家を招へいする機会は設けていきたい。
- 新潟ローカルの舞踊家・市民に対する文化的な機会の提供を充実させていきたい。毎週末スクールを実施し、専門家としての身体技術をより広く提供していきたい。

### ○質疑応答

- Noism0 を立ち上げるのはプレゼンテーションの発言以外の目的はないのか。  
→国内でも Noism を呼びたいが規模・予算が折り合わず呼べないところがあるので、

小規模編成にしそういったところへの活動チャンスを広げたいということ。

- Noism0, 1, 2 の人数はどのくらいを想定しているのか。  
→1 は 14 人と準メンバーが 2 人。0 については円熟したダンサーを想定しているが、明確にメンバーを分けるかどうかは検討中。
- スクールは誰を担当にするのか  
→担当制にはせず、ダンサーでスケジュールを調整し、全体で回していく。
- 少子高齢化社会にあたって、子供や高齢者が Noism と触れ合うことは宝と考える。アウトリーチのような活動は想定しているか。  
→これまでも「からだワークショップ」を実施している。高齢者に向けては要望がなかったこともあり実施したことはないが、これからの社会情勢を考えれば、重要なことだと思う。まずは Noism がスクール活動を実施していることを認知してもらい、要望に応じてその都度、実施していきたい。
- Noism0 を立ち上げることによって、1, 2 の公演が減ることはないのか。  
→減らすことは考えていない。Noism0 と Noism1 は演目の中で分けて作りたい。
- 総称を変更することの意図は何か。  
→新潟をつけることによって、新潟市の PR になればよいと考えてのことであり、他の意図はない。
- Noism0 やスクールを実施することによって活動が複雑になると思うが、スタッフ体制についてどう考えているのか。  
→個々のスタッフの能力に関わってくるが、しんどいということであれば、体制を考えていく。すでにスクールのスキームはある。ダンサーについては今まで活動していた時間内で行うので影響はないと考えている。
- 基本的に現在のスキームで実施し、業務超過があつて回らなくなった場合に対応していくということか。  
→支配人、財団、市の了承を得たうえで、大変になる前に、全体で精査をしていこうと考えている。
- スクールについて受講生のレベルを分けるのか  
→時間が限られているので、形態は試行錯誤する必要があるが、舞踊家向けのものと、「からだワークショップ」のような一般向けに分けることは考えている。舞踊家向けのスクールをレベルごとのコースに分けるかどうかは検討する。
- 卒業した舞踊家とのネットワークについて  
→固定の舞踊団として活動をしているので、舞踊家とのネットワーク構築は難しい。振付家として活動している人を招へいすることは可能。もしカンパニーを立ち上げる人がいれば、新潟に招へいして公演してもらえばよいと考えている。
- 良いダンサーが良いファシリテーターとは限らないが、ファシリテーションスキルを身に付ける余力はあるのか。参加者が多様化すれば負担が大きくなるのでは。  
→これまでの「からだワークショップ」の経験を元に、これから経験しながら習得していくしかないと考えている。

- 15年間やってきて、行政への思いや考えはどのようなものがあるのか。  
→これまで、市、支配人、財団との関係に課題があることは承知している。  
舞踊部門芸術監督として、それぞれと密に連携を取りながら活動していきたい。
- 舞踊部門芸術監督としてのビジョンについて、Noism 活動以外の活動プランがないように受け取れるが、これは今後も変わらないということか。  
→スクールについては、Noism がすべき活動ではなく、舞踊部門がすべき活動だと考えている。舞踊部門として、舞踊を学べる機会を提供するべきでありその際に Noism を活用した方が良いということである。
- 他の舞踊作品が観られないということへの不満にどう答えていくのかということに関して、既存の予算内で対応していくようなプランはないのか。  
→他の作品の上演についてはこれからも検討していくが、Noism の活動がりゅーとぴあの舞踊部門の特色だから、Noism の活動費を縮小して他作品を公演することは考えていない。
- 財源が減った場合の考えは  
→財源が減れば、舞踊家の人数や、舞踊団の数、事業数を減らしていくことも当然考えられる。スクールの収入や協賛金、チケット料収入の検討もしていかなければいけないことも認識している。
- 長期の構想としてどのようなことを考えているのか。  
→劇場文化を成熟させるためには100年かかると考えている。3世代に渡って受け継いでいきたい。

## ○意見交換

### ●Noism への評価について

- 15年前に Noism が始まったとき、全国にここまで見識のある館はなかった。新潟が世界に誇れるものである。Noism がなくなれば外部からのマイナスイメージは免れない。
- 新潟市が日本で唯一の専属舞踊団をもつことは価値がある。
- Noism によって全国や海外でのりゅーとぴあの知名度があがり、新潟市のシティセールスとしても効果がある。
- コンテンポラリーがなかなか浸透しづらい中で、15年続けてきたことは Noism の成果である。
- ダンスという新しい切り口でりゅーとぴあを市民利便施設としてだけではなく、文化発信の施設として存在させている面でも価値がある。
- Noism がなくなれば、公立文化施設のトップ16館から外れることはあり得る。文化庁の補助金についても切られる可能性がある。
- トップ16館の評価について、アウトプットを出していれば、金森氏がいるりゅーとぴあではなくても、専属舞踊団のあるりゅーとぴあとして評価してもらえるのではないか。

- りゅーとぴあは Noism だけではない。仮に Noism がなくなってもトップ 16 館として戦える力はあるはず。
- 本当に良いアーティストは資金集めも上手い。

#### ●活動のあり方について

- 市民との接点は市のビジョンとしてもかかせない。活動を行っただけで達成なのではなく、顔が見える舞踊団であるべき。
- 新潟には Noism 以外にも日の当たらないところで細々と活動している人もいる。市民の声には、Noism だけがダンスだと思っていたという声もある。
- 公金による支援を受けているなら、やりたいことだけをやるのではなく、新潟で頑張っている人、日本で頑張っている人との繋がりをもってコンテンポラリーを振興してほしい。15 年で少しずつ変わってきてはいるようだが。
- 市の資金を使い活動しているため、市民に貢献してほしい。
- 新潟で集客が伸びないのは、市民が金森氏の世界にまでいっていないということ。金森氏はそこを考えないといけない。
- 契約期間を 12 か月ではなく、実際の活動期間に合わせ、6 か月、10 か月等としてもいいのではないか。
- 監督の意向をすべてりゅーとぴあ内でやろうとしているため、契約を 12 か月にすることで Noism に縛られ、市民と触れ合う余裕がない。ダンサー個々の表現の場も減っている。
- 100 年構想は周囲のマネジメントがないと厳しいだろう。

#### ●ガバナンスについて

- 金森氏の外部との関係において、ファシリテートする人物が必要なのではないか。
- Noism の芸術監督と、りゅーとぴあの舞踊部門の芸術監督を分けてはどうか。
- スタッフ管理と予算についての視点が欠けている。予算面について現実的な相談をしないといけない段階にきている。
- 監督の権限が大きいため、組織としてのバランスが悪い。
- 一人のアーティストへの支援のように見えてしまう点は、問題がある。
- りゅーとぴあ、市、Noism の活動方針の乖離が広がっている。
- Noism はりゅーとぴあと市のコンセンサスを取る必要がある。市とりゅーとぴあですり合わせをすることはあるが、金森氏と話し合いができていない状況である。
- Noism の活動に関する調整窓口が金森氏のみという仕組みに問題がある。
- りゅーとぴあや市から事業の提案をすることが必要なのではないか。市や財団のプランに対して金森氏がアドバイスをするというのが本来の形だろう。

- 予算が削られていく中、ほかの事業との兼ね合いで Noism の事業費をこのまま維持していくのは厳しい。また、スタッフも限界にきている。Noism0 とスクールをプラスアルファとして実施するのではスタッフが持たない。
- スタッフの疲弊については、今すぐ何とかしないとイケない。構造に無理があるなら市として対応すべき。
- 金森氏が言うことを実現するには、今の倍は予算が必要だろう。

### ●存廃について

- やめる、続けるという単純な 2 択の判断にならないようにすべき。やめる場合、続ける場合にそれぞれ何が必要なのか、論点出しが必要。
- 続けるにしても条件を提示して金森氏と直接話合わなければいけない。
- その場合、金森氏に足りない視点（スタッフ管理、予算、ものごとの決め方）をしっかりと指摘しなければならない。
- 話し合いの場は市から金森氏に提案すべき。
- Noism という活動に価値があると考え続けるなら、短期でもいいから持続できる仕組みを作らなければならない。任期についても検討すべきではないか。
- 継続の場合、合意した継続条件が守られ、達成されているか定期的に第三者によりチェックする仕組みをつくるべき。（検証会議を行っていき、活動自体を評価する。もしくはプレゼン等の方針通り活動が実施されているかを確認する。）これは他の部門の芸術監督にも波及するしチェック対象になり得る。
- Noism との契約が終わっても専属舞踊団という仕組みを残すという選択肢もある。コンテンポラリーダンサーの中にも芸術監督をしたいと考えている人はいる。チャンスが増えるという意味では有りかもしれない。
- やめるとしても喧嘩別れにならないようシナリオプランニングが必要。